

薰菑錄

乃

增
775
51



曾
775
51

芝蔴錄卷之十六

目錄

御讓位之事

杜乎中年中行了略 御即位次第

大和豐秋津洲卜定記

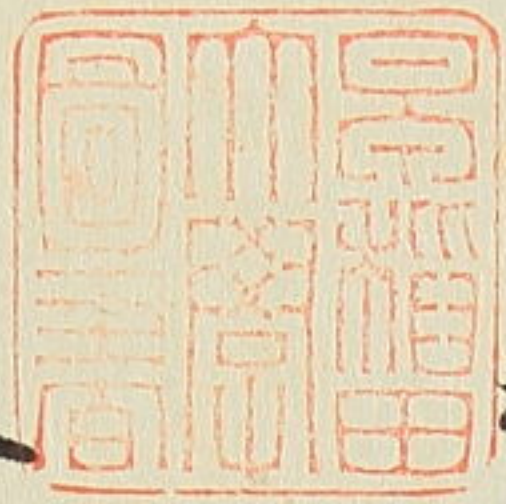
大日本國一宮記

東家秘傳



萬葉集卷之百五

中村直道輯



御歳位之事

天子^{ミコ}よあ^ニび^シて受^{ウケ}禰^ニの時^{トキ}々^々太子^{ミコ}奉^{タテマツ}上^ノて侍^ウ子^コに侍^ウれて
 上^ニ表^ノの禮^レありて天^{アメノ}慶^ノ九年^ノ村^ノ上天^ノを^シて御^{ミコ}兄^ノ未^ミ蒞^シ院^ノの由^ユゆつ
 つ^ニ公^ノあ^ニる^ニ所^ノ上^ノ表^ノ揖^ノ讓^ノの後^ノありてその後^ノ安^ニ和^ノ二年^ノ又
 兼^ニ融^ノ院^ノ乃^シ冷^ニ泉^ノ院^ノの由^ユゆつ^ニる^ニ所^ノに^シて寛^ノ弘^ノ年^ノ三^ノ條^ノ院^ノの
 一^ノ系^ノ院^ノの由^ユゆつ^ニる^ニ所^ノに^シて位^ノ即^ニち^シて^ニ時^ノ々^々此^ノ禮^ノありて
 かり^ニ位^ノ切^レる^ニ時^ノ々^々揖^ノ讓^ノ此^ノ禮^ノなり長^ノ和^ノ五年^ノ後^ノ一^ノ系^ノ院^ノ乃^シ
 三^ノ條^ノ院^ノの由^ユゆつ^ニる^ニ所^ノに^シて後^ノ一^ノ系^ノ院^ノ九^ノ系^ノ乃^シ切^レる^ニ
 一^ノ系^ノ院^ノの由^ユゆつ^ニる^ニ所^ノに^シて^ニ時^ノ々^々此^ノ禮^ノなり一^ノ系^ノ元^ノ四^ノ年^ノ順^ノ徳^ノ院^ノの
 上^ノ帝^ノ門^ノ院^ノ兼^ニ清^ノ讓^ノり^ニと^シて^ニ時^ノ々^々改^ノ祚^ノあり^ニて^ニ時^ノ順^ノ徳^ノ院^ノ十四^ノ年

りて官符といふ是も二ヶ國の國目此をばつた海より
文なり勅符とて官符ともおのく清印此をかりて正
よ又本契とて内記は作て本よて割符と作りて上卿そ
此國よなきゆよりふ四字と書て内記は終つて内記のこれ
と右とと地力として二より作りて叙令さて上卿は奉り
上卿更奏聞し清印等此奉たりて勅符とはお納言
ま鈴り作て本此函に入て終とてゆひて免松やうて
かしく封むるは本契とは内記はしてはみくとはれく
と此國の名とてはす内記はて其の終と書て革の裏
ひきてその國よなきふ勅符はて終とてはくるなり本契の
左の方とは國目此よりはつたり右の方とはお納言はて
鈴のわつひつよおさうしむ是は開開の所は佳に終てこれ

うといふはなつんといふなり國開此後には五位の人を用ゆ左
右馬寮は作て中馬と終ふ上卿その役とりて勅符
本契は終ふとて此國よまるとして是開は終るべしと
作す是よ又内令一人とあつて官符といふは終る
終二口とと終ふ也此後節會は儀式あり大冷陣の所
うして内記とりて宣令の終はたつてまつては内記
奏聞ありは終る清書して又内記奏聞つり定まれ
る事なり宣令使より中納言成り奏儀と用ふ則その
人よあれと作て夫より南殿よ常におれ日清簾をかけて
あつては出内よまはる清此は將も建敷は袍り重胡録
を負て陣とて常の節令はつてはつてはつてはつてはつて
て軒廊よまはる三内は踏よのぞとてはつてはつてはつてはつて

弁宣命は坊のちて昇殿して元子はく則関門と
作すこと聞目なはく内辨二音舎人とのまば少納言
かはりて版つくおの附内弁日称とめせし作す日称
と六佐の上の人とりふりて後法御衆上列をて異位
重行衛府の公らから衆と帯して列するり次は内弁
宣命使とのみ免きぬ人列と離れて階より入りて内
弁はうしはるま内弁宣命はなげく是とけりて教とく
たりて軒廊のわたりありて次は内弁中敷して公ら
の列はまぐさるる次は宣命使列乃衆と廻りて版位より
て宣命とよむてはびよまむりて宣制二段とまかり
法位をとりけりて一段おこに内弁とつては或は後法
御衆より例ありて是は天位太子より譲りけりて宣命

此文よのきりては城百官うけたまはけりてかこまりり
中へ宣命使本列よりまは内弁中敷より勅授帯叙
乃人の中門をぬり附叙を撤するに勅授は帯叙すあり
は職よりゆりて終城ありて叙と帯をりおとせは代
よめはふよりて代かこまはまの帯叙をやむり事也
とこよりては衛府官は職よりけりてよりて帯叙すかこ
はるりて宣制二段の附法條は半先例も同なり
但保元は多きハ洋帯なり次は叙置法済の事あり
回すは御所より三種の神器を勅帝へ渡さるは後より
掃部寮始の間建道を通信次將あり叙置を帯て
送たれは叙ありて因白下は扈從すの幸はあはれ道
清階とのけりて内侍より是とまばく内侍二人のけり

叙職を承く初の中殺の安置を其後新日置御守の
御守の如く関白御前の圓光の候に先藏一人と定作を
在り人別庭よりよく御端をその後其在人をとりて
牛車轡車昇殿執事等と名のぶらりたるごとしと
作人院人陣より出て第一忠と卿より作人上卿則印記を
りて作を次よ云卿以下おの作にけりたる依て在申す
すして洋軍も次よとてさだの在人ととりて在り人
其在院人一人六位院人殿上人の昇殿の事と作を在院人殿上人
として出納の作を次よ新補の貴首以下慶を奏しと
殿上人候とて其後官が在院人方の古書に在りて内侍所
渡御の時公府なるべし職事一人供奉を主上の在り
たりたる志の在り殿上の難具もとりておきて治す

おとくと志取つらふりい何れも殿上は名だん道
衛御の書の中あり近代にそのおととはるとなす
殿上といふ名は候儀ゆいと志をとり祚の字本ハ祚の字
ありとて多分祚の字と用ひ其なりけ二字のひとて
新帝へのけしお名目之受祚と其後と新日のあらに
とるなり名なり脱履といふはば候ぬぐと志をとり昔
農舞といふ習人の天位といふは心は御さまを候
位と志といふは敬履とぬぐと志をとりおひたりおぬる
とつとぬぐといふおとと志はなりわと志心はなりた
乞へ向ふはばおとと志はなり殿上といふは別は
常此時立玉は本或ハ上皇の詔命なり候とてなり
なり嘉業二年堀川天皇崩御の時鳥羽院の殿上

と社帝白河院名額命改とて仍の道一がぶらう又久安二年
後白河院の踐祚永承二年後鳥羽院の踐祚等又建仁
元年其後元弘建武叙室なくして踐祚永承永承の
例とりらわらる承久三年後堀河院の踐祚天下擾乱
よりして関東の沙汰して立王法皇此尊号此の有り
あつてしうり一例也觀應三年後光嚴院の時時の節
會此儀なく叙室なく上皇此詔命となく母事新儀と
しておこなふれ一とてなりしうり一末代とあるある
つよふとなくもおのゝとて是の壽永は在在後從宗と次子と
なりてたてまつしうり宣命此詞を右の上法皇此詔命の
より此の之但宣例此儀よりなる大御陣よりして大御記を
りして中務ははらふとて沙汰とてしうり一とて作らるなり

御即位之事

即位して天子受禪の後まありて南都の位は流せ給て
まづりて百司并民に親教とみえさせ給ふしうりその
月ハさきまの月なり一其所を若るる大極殿の高御座
よは色流ひていり此のより極々冷泉院の紫宸殿より
ありて即位此儀よりし御門の邪氣をいさへせ給ひま
よりして大極殿まで一行奉りかたり一あや又後三條院治暦
四年乃御即位大極殿焼失の後いまも造化ありしより
て大政官殿より一とて行の道なり
主後壽徳天皇治承四年此御即位と紫宸殿よりして
仍りては禮と大極殿焼失せしうり後鳥羽院元暦八年
又吉政官殿より即位の事とせ給り後一向一宮乃

藤中しておなまをうけつゝなりなり御即位七月時上卿
者陣して舞ふ作と是代初^{ニカ}とむ又擬侍^{キジレ}候のの
上卿例文硯等とありて奉後として是と書せし侍候
とつゝ天子は左右侍て拾遺補^{ホトケ}の職とけりささるか
より侍候のりつゝも即位の時にお一日御さき人
えりひてそお代とするよりて擬侍候は各侍候
なりたるおのりつゝ一人三一人に位の人を用ふ
或は親王として三位の侍候も用ふるもありし又左右
御言者一人宣命使一人中納言と目^メ由儀一人少納言と
用ふ是も皆擬侍候のころり文よのすれよあり又
禮^{レイ}被^ヘのふの人数を職奉一紙とありて大内より
大内外記は作てそ人よりはせえりつゝいひか大將代

衣帳^{イチャウ}の女王まけ威儀^{イキ}の令婦^{メイフ}なりつゝおとやをぬかぬて
よりささるり作らぬ
由^{ヨシ}乃奉^{ホウ}幣^{ヘイ}とらふ御即位あり御記として伊勢を祀ま
中さるるあり神祇宿の約奉ありて奉幣は使とたて
ら御奉也本儀は大内より建禮門の御奉なりて
ゆいふ奉也志^シれと後三條院治暦四年即位の時建礼
門なるよりそ神祇宿としておとと云々する志ありし
且流例^{リウレイ}とありし諒^{リョウ}周^{シュウ}此時をたおるか知まの時に
傍政神祇宿の奉向して幣使とありし建武文和此
即位の時を勢別款陣とありしより奉使よりなる
しなり

行奉此儀式ははひのむし伊勢^{イセ}興^{キヨミ}の意記を用ひしる意

たはまきれ苑のくをの存とてうらて沖樂はくよま
うるこれ沖神事此時の初幸ふめさう沖樂也又終乃
奏發躰沖はかともれを作するをこれ一とて又神
事此行幸の例也沖樂ハ神祇宮北門より入て水の鹿
もと下沖あり今日此沖取は常此沖裝束は白
き平絹の沖袍（イケン）に玄文巡（ムシ）の玉（ゴウ）の帯とさうなまふ沖積
と名はきて白（シロ）絹とて沖冠（カウ）の中子（ナカゴ）とぬきせぬふ
これ沖神事此時の儀式なり次よま上沖洋乃た
うつり流うせぬてお辰年洋一ゆふこれ神宮へまて
ま流うぬ沖帯とね一ゆふ一なり次よ舎人を二
青めさうとて少納言とて版位（イタ）よ若時中辰忌部と
ゆせと作らる内介官は沖帯とて忌部これぬて退

おま中辰春進をぬれ神申て進禮（マドレ）や初言（ハツコト）とて作ら
ゆまて作勢帯（サセオビ）は四姓乃使と祭遣（ハツケン）せうゆ四姓（シウジ）
王氏中辰中辰忌部是なり使の王（オウ）のあ（ア）も馬寮乃
沖馬をゆふ恒例臨時ゆれと定はるゆこ
御即位乃叙位此事恒例の叙位にうもふおか一恒院
宮乃沖法（キウ）は當年此字取のせ八件佐伯和氣百濟（ハクサイ）此四
姓（シ）よ爵をゆふる常の叙位りかろゆり
禮服沖覽（レイフク）此事ハ當日は天宮此看沖一ゆこ衣覽（イケン）
十二章乃沖服と天覽あぬゆなり
初まは時改折政乃直廬（チキョロ）ゆして叙位下乃事とて執
ゆふあり衣（イ）のふ衣龍此文なり覽（イケン）やとて沖冠（カウ）の各
なる十二章とて八日月星辰山龍華蟲宗彝藻大粉（オシロイ）木輔

敵以上十二此文と藏する衣裳あり供赤衣アキキヌ日と月と
早龍と大神の繡ヌイキせしめて十二とわたりく文
とせざるもや流の首カビラはまき流カハよりて衣籠と衣ハ
巻マキころんと白綾ハクシユと玉佩タマシヅメと二流あり童ドウ體タミ此御時ミトキ日ヒ形カタの
天冠テンクワンを着し流ナガふ昔ムカシハ毎年トシトシ正月トウジツ朝アサ日ヒの朝アサ賀カ御ミ即位イ即位の
日ヒにかふ事コトハ公キミ々々禮レイ服フク冠カウ等トウ位イ階カウよりて差サ異イ
あり冠カウハ玉タマ乃ノのなる此冠カウ禮レイ服フクは大神オホカミ小コ神カミ裳モ等トウあり
三位ミタラシ以上イサナハ玉佩タマシヅメとばく綾アヤとつ物モノハ乳ウチのトよりむすび
心ココロ平ヒラ緒オビの類タガなる天子テンシハ佩シヅメ杖シヅメ二流ニリウと流ナガふ而シテ下シタハ一
流イチリウなり

即位イ即位日ヒハ天アマ極ツク殿テンの高タカ御ミ座イザとよ終ハヒひかふ太オホ政シヤク宮ミヤの座イザ
かて行ユクり終ハヒひかふ高タカ御ミ座イザとよ終ハヒひかふ太オホ政シヤク宮ミヤの座イザ

十一丈ハ銅ドウ鳥トウ乃ノの幢チウと云イハふ此コノ赤アカ日ヒ像ゾウ此コノ幢チウ赤アカ雀セキ青アヲ龍リウの
旗ハタ等トウと云イハふ西ニシノハ月ツキ像ゾウ此コノ幢チウ白シロ虎コ玄ゲン武ブ乃ノ旗ハタと云イハふ此コノ
幢チウの西ニシノハ月ツキ并ナヒの幢チウありその内ウチノ元ゲン子シと云イハふ中ナカ階カウ此コノ南ミナミ
七シチ丈チウと云イハふ大オホ極ツク殿テンあり曲マカド儀ギ替カヘ者モノ此コノ放ハツ左サ右ミナミ近チカ乃ノ次ジ
將シヤウ此コノ胡コ床シヤウ常トウ此コノ儀ギと云イハふ此コノ儀ギの百ヒャク司シと云イハふ威イ儀ギの
物モノと云イハふて庭ニワ中ナカノ東ヒガシ西ニシノ列レツ並ナヒ外ソト辨ハジメ乃ノ御ミ座イザハ民タミ部ベ有アルの
廳テイ代ダイ此コノ帷イ者モノと云イハふ主ヌシ上ウヘ冕ミカド服フクと云イハふ此コノ儀ギの後ノチ房フウハ
高タカ御ミ座イザありて高タカ御ミ座イザハ内ウチ侍シヤウ六ロク命メイ侍シヤウ四シ人ニン
おのゝ禮レイ服フクと云イハふ此コノ儀ギの後ノチ房フウハ内ウチ侍シヤウ六ロク命メイ侍シヤウ四シ人ニン
十八ハチジウ人ニン乃ノ女メノ孺ニョ翳シヤウと云イハふ此コノ儀ギの後ノチ房フウハ内ウチ侍シヤウ六ロク命メイ侍シヤウ四シ人ニン
あり物モノハ插シヤウと云イハふ此コノ儀ギの後ノチ房フウハ内ウチ侍シヤウ六ロク命メイ侍シヤウ四シ人ニン
と云イハふ此コノ儀ギの後ノチ房フウハ内ウチ侍シヤウ六ロク命メイ侍シヤウ四シ人ニン

とどめて見ゆ群臣ありて西向すは侍婦して西を地よ
津くる事也主殿圖書寮のほろさ大徳此十月つと香と
しくたの香は天子位よけりせ給ふすは天子ははる焼
香なり宣命使の人啟位よつきを割方紙のふ群臣
再拜齋端も武官旗とありて一万余を称す幸れらる
んこすの厨は左の侍次とて御前よすむその進退
傍あり勝行あり返巡して御前よありて坊城
引て祇事ぬく奏ひては青高長なるべし北よ見え
うりあまは今日此大祓事かりぬるすと天子よ志し
だてよはる波なり二元の女郎騎とておぼゆるひさたのふ
こ一褰帳二人すこよとて御帳とてふと後天皇後房
一仰り入せのふ兵庫のほろさ証とてうち敷とて

百司の出入とほぐぬるくりく式文よのせきり今日禮殿
ときふ人の左右の掖侍は二人が納言二人同曲儀の少納
言内亦外亦れは宣命使等も女官の褰帳威儀の
令掃等近衛の次將の金波珠玉とてかごまる甲と
着は外衛の翳代は武禮冠は襦袢を着はくり九
たまを志ふはその中とねらひかゝる九斗の一毛を志
まはりたる

御禊行幸之事

大嘗會行のまゝとて十月よは幸あり豊此御さる
あまの世俗は川原の川原よ解祭は川よ
のたてて修する事なると二条三條の川原幸と
先とめりる大祀は一月志澳齋中祀は三日小祀は一日也大

嘗會の大祀ふらりて十月より神事つり川原に
中つり一川神事然るらりて大嘗會延川
つらぎあふ入神禊の事つりまづ九月中旬は
陣者て装束司次方司の除目と申つりは湯察り
作て神禊の日時を初申さむ装束司つり入神禊
はよて兼日此儀點地等の事を奉りも長官一人中
納言次方一人中弁を用ふ判官二人主典二人なり
又次第日つり入神禊行幸はよて諸司百官あつり
佐奉するらりて御前此長官次方判官主典御後此
長官判官判官主典の職を定む御前の長官一人
細言参議の中と用ふ御後此長官一人参議一人
用ふ是ハ御樂の前陣後陣の行列を奉りするまよ

て次第日つり入神禊はよて次方一人主典一人の行列の事を奉
す此れを國薄の圖と云なり十月上旬は陪後五位の
守二人御前二十六人の歴名留守の参議なるは
一人瓜定めて装束司よつり入神禊あり装束司吉日
らひて宿此東廳より着て次第此を女を侍らふ點地の日
ハ近衛少将瓜執使と云ふありその所輪のことより川原
よゆきむらふ長官次方以下ありて帷の所より着る事を
ゆふ川原此地と點して南北半五丈東西四十丈は
大徳の
川れと云ふらりありて此を國司檢非違使の作て汚穢
不淨といふらり馬此園入と云ふらり此は後帷處分
云事あり諸司の着すべし輕帷寫と云ふらり御禊の地
上右いさご海事なり平城天皇葛野川より神禊

あり、嵯峨の帝を松が浜より幸あり、文徳天皇の鴨川よ
し、御をくあり、その後二条三条宮の末を用らる近
代は、大略三条末と懸く、近陽寮を去る方を物
申す者なり。

當日は大内より川原（の幸なる大内や来て後、兼日を政
官聽（の幸なり）とく、御に御り、時刻は王
御仗の座より参者も、次官以下かりに、節叙すべし
中宮下より、御主の時を、折改左道の陣内より、列す
べし、中作らる節下は、大内と云ふあり、節と云ふは、旗の巻
世作は、大がく、らと名は、くそ、旗の中は、儀奉するは、
了そ、節下は、大内と云ふ、儀奉の、折改、唐鞍より、鞍を
巻く、馬の、御尾袋、馬の、馬副の、尻に、から

うり、之、禮、力、八、人、變、給、此、袍、と、い、ふ、物、と、い、ふ、左、の、柳、子、此
ま、右、の、然、の、文、の、袍、なり、手、振、十、二、人、策、此、布、の、袴、と、名、
流、は、此、調、及、懸、十、人、持、衣、袴、也、舍、人、后、厨、者、八、人、櫛、の、舍
人、二、人、お、介、雜、色、袴、の、敷、定、く、と、折、改、は、或、ハ、騎、馬、或、ハ、
乘、車、也、車、ハ、か、ね、く、す、唐、庇、と、用、ふ、上、筋、の、禮、力、番、長
は、ま、も、と、變、給、の、袍、と、名、を、地、下、の、前、敷、さ、く、ま、は、敷、か
難、色、去、ぬ、と、い、ふ、御、主、の、時、ハ、中、宮、同、樂、あり、又、御
代、儀、奉、此、例、あり、お、の、く、女、房、の、車、き、ぬ、の、妻、と、出、て、こ、り、
く、お、物、見、也、お、の、く、ま、の、御、者、ハ、儀、奉、の、百、官、裝、束、馬
鞍、等、以下、よ、の、は、稱、此、の、幸、ハ、か、ら、り、鞍、と、名、系、と、い、ふ
物、と、い、ふ、な、り、兵、庫、寮、の、時、刻、り、い、つ、り、て、列、陣、此
敷、進、敷、行、敷、な、り、な、り、む、前、後、此、行、列、式、は、さ、く、

んをさり御雲ハ鳳輦なり川原ハ頭宮リいりてハ
まづ沖胎蛭ハ御輿於下せり下御なりせりふまより
腰輿もあきれて沖襖ハ蛭よりほくせりふまより百子
帳のうちハ大床子ハ看御ハ砂ハ百子帳と云ハ槓柳と
以て頂とねりて四方ハかこむとてうましく前後と
同じく出入るやうにわたりし中ハ総代と志き
て大床子ハさしりけし床子ハほくせりふなり百子の名
そは夜いまはほくせりふなり一ハ百子の名と
云ハの帳とほくせりふ交なれぬふんとしぬぐ一ハ上御ハ
水乃半ありハ水目と依とそは後大床子のまの平
おの沖胎ありはくせりふ神祇宮沖あり物と依と
宮ハ解除ハ祠と奉るハこれ沖襖の儀也云ハ下
おのく扱物をまへハ神祇宮太麻をひく次ハ腰
輿ハ駕して沖胎ハ蛭ハゆきありふ晴の沖胎
歌乃沖胎をど依依とまぬ山城の因司獻物三十捧と
りりて庭中ハ列立ハ大床物の名を同じのちか
いそにいましめく作も又今日ハ見奉と奉る半あり
神祇宮帶帛と逆色の諸祓ハあがらたてまはらり
ありその後置奉ありさだのおごりハ大床外記ハ作
解陣ハ証と云ハし諸々ハ下退ま

侍して書進す

大嘗宮ハ悠紀至基各別なり大極殿の筑尾道此前ニ
ち道を送ましく是ハ海ニシテ神格を信せし所也
又そ亦ハ三許丈とさりて廻立敷とて是ハ神水と
めさるゝ神ノ悠紀乃神事とて後入は殿ノ神事なり
て又神ノ水ありかゝるも一廻立敷とて亦あはるる
小島ノ神事ノ夜夜なり志ろきねとて一廻立敷
とて草ノ一廻立敷とて神格を信せし所也
つらひもやひひと神格を信せし所也
終りては是も亦神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
入日加等神ノ神格とて一廻立敷とて一廻立敷
して是も亦神格ノ一廻立敷とて一廻立敷

シして是も亦神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
神代ハ此の事ヤカシクハ是も亦神格ノ一廻立敷
がりおまると物なり是ハ神格ノ一廻立敷
て神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
梅の枝乃守はり好らぬとて一廻立敷
つらと神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
のひと神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
用立とて神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
あれと用立とて神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
あはく神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
も打ちぬとて神格ノ一廻立敷とて一廻立敷
是神格ノ一廻立敷とて一廻立敷

小志といふ志者物大なるは回半おれと載^{タテ}終^{マテ}のやうかまじ
るなり

五^{ウツ}節といふもの毎年十月より二十日あり大嘗會は筆
よはかきくたそのたうととぶぬとて昔法皇系の本宮乃
より野比瀧の家まきしとある時日の言とてに琴と
洋して御心とすむとせぬひるにひるひのふれぬ秘より
あやしく世をまのゆりあるは御心とせぬとての雲の
中へ神女のすざとありて御心とて御心とての雲の
ぞてかろでまると御心といふひるも御心とてあり
ゆ人のほいよとてあるなりとての神女神といひるふひる
あやしく御心とせぬとて御心といふ名はせぬなり
その時御心御心とて御心といふ名はせぬなり

乙女に心をとめさひすそううあまも
たれとて御心とて御心といふ名はせぬ

本朝月令といふ書よの勢作りたよとよりして後の世
まであま節といふ名とて五人のまひ御心と御心と
御心と御心といふなり

中比良の日の舞御心入帳臺は御心といふ名はせぬ
常寧殿ありしてあの本やりの宿の庭とて御心とて
西庭とて御心とて御心とて御心とて御心とて御心と
帳臺といふ大御心は御心とて御心とて御心とて御心と
あは御心とて御心とて御心とて御心とて御心とて御心と
せしは御心とて御心とて御心とて御心とて御心とて御心と
毎年いふ人よとて御心とて御心とて御心とて御心とて御心と

分と存づるまで國司は女房をたまはる人とはならん分と
ソにて公卿はあつてむすめをたまはるまのつとせなふなる
づと帳臺の式しつゝ主上らうらう大内ら向(向)御前
て御前以沖次する事ありあの所は主上御直衣(直衣)御
さしぬき着御前りこれの殿上人はさうらまはせられたる
ます也と御前一人ある大取のさうらと志とぬのさうらハト
はなるさうらといふやこれ女房さひして来とあるさ
后所の廊の礼拝なりし事あり殿上人も神とくを
此情なり

御前試(試)八雲の日は事ありあれは夫人の御前御殿の
いしつゝのさうら御前する事あり宿願めてハ後房れひ
さしに志との御前風とさうらとさうらとさうらとさうらと

らうらあり

露臺の礼拝しつゝ事あり渡廊の殿上人さうらひと
藏人頭(頭)さうらとさうらと神とくを事なごり御
前のりにいさまや物まはるさうらとさうらとさうらと
あるからりあつて推参の院の御前ともめて野曲れ
殿上人をさうらつて御前(御前)いさまや礼拝なりありさひ
の津といふ事とさうらひと殿上人と御前(御前)ある事とす

さうらあり

童女御前(童女御前)しつゝ事ハ卯の日は事なり京指の久い志
やくおりさうらとさうらと朝前(朝前)のひらひらさうらと
大覧ある事なりさうらハ簾中は出御なり殿上人
是とはおき作(作)さうらとあつてさうらとさうらとさうらと

く神会とすなり申ふ幸なること一代二返此重幸
是よりこそをくす

殿上此淵醉ハ寅卯の日六の幸あり殿上人も自ら
或ハ衣冠とていりく此出衣として盃酌とすむ朗詠
今秋なごう多ふ寅卯日ハ歡無極靈山御山とてハ卯
卯日ハ新豊蓬萊山とてふといはり貫首ハ人級と解
礼誅ハ事わりすそくつごこいひて女房をと見物せ
幸もむむくい留まると

殿日此節會ハ中后の人天神の壽詞と奏せむく
といふ神の枝とてちてかきこてて幸とすくく
あどあり西國よりハ獻物とばたぬつ物と名づく宮
内省より奉るくはもとばたらすさひくす兒と名づく

去るくくろさ酒を依もる幸なり

三日節會ハやまきまひ四節ころハ舞以奏と

今日消暑堂ハ御神樂あり消暑堂ハ八省院の十二堂の
そはつたり大極殿とておまかりつ時の名なり宮の願
ておかまかり時ハ波廊城とてそは所とていふれもか
消暑堂ハ御神樂といひは家作りなり主上ハ御末節
少て薫中ハ大赤子の御なり此御わり執柄大臣とて
人より者なと節會ハ奉まふ御を小忌候者として
かごしと掃やハ神樂ハ波御遊り神樂の曲ハ緩合
阿知女神星三首朝藏等也御遊りハ安名尊伊勢海
なごはりのおこり或ハば家とのなごり

午の日ハ豊明の節會なり久承評去志評杯つみ評と

養中節會の儀は、（注）此の儀は、（注）内亦外亦あり、（注）悠紀主基
とて、（注）此の日の、（注）東西より、（注）わたりて、（注）二夜つゝ、（注）かゝるゝ
豊明の日の、（注）一宵かり、（注）儀式なり、（注）此の、（注）日記等より
見ると、（注）大抵、（注）志、（注）心、（注）あり、（注）御、（注）那、（注）任、（注）は、（注）漢、（注）朝、（注）の
禮、（注）儀、（注）を、（注）由、（注）な、（注）ぶ、（注）と、（注）あ、（注）り、（注）大、（注）嘗、（注）會、（注）の、（注）神、（注）代、（注）の、（注）風、（注）儀、（注）を、（注）う、（注）は、（注）は、
大、（注）嘗、（注）會、（注）の、（注）式、（注）を、（注）は、（注）前、（注）行、（注）の、（注）大、（注）臣、（注）に、（注）作、（注）進、（注）す、（注）と、（注）あ、（注）り、

文明十年二月日

御判

此一帖若後成恩寺殿下之制亦作也
可為鴻寶者予可秘

明應八年林鐘下澣書之

薰齋錄卷之百五

右武衛藤判

文政六年
四月四日
直道

薰齋錄卷之百六

中村直道輯

禁中年中行夏畧

正月

九日寅刻

四方津

清涼殿東庭、（注）御、（注）座、（注）に、（注）依、（注）り、（注）掃、（注）拂、（注）の、（注）儀、（注）に、（注）依、（注）り、（注）掃、（注）拂、（注）す、（注）と、（注）す、（注）。

内、（注）務、（注）寮、（注）官、（注）人、（注）に、（注）依、（注）り、（注）掃、（注）拂、（注）す、（注）と、（注）す、（注）。

御、（注）座、（注）に、（注）依、（注）り、（注）掃、（注）拂、（注）す、（注）と、（注）す、（注）。

般寮沙汰

沖出

沖、（注）簾、（注）御、（注）座、（注）に、（注）依、（注）り、（注）掃、（注）拂、（注）す、（注）と、（注）す、（注）。

沖、（注）簾、（注）御、（注）座、（注）に、（注）依、（注）り、（注）掃、（注）拂、（注）す、（注）と、（注）す、（注）。

（注）官、（注）人、（注）の、（注）内、（注）務、（注）寮、（注）の、（注）掃、（注）拂、（注）の、（注）儀、（注）に、（注）依、（注）り、（注）掃、（注）拂、（注）す、（注）と、（注）す、（注）。

（注）掃、（注）拂、（注）の、（注）儀、（注）に、（注）依、（注）り、（注）掃、（注）拂、（注）す、（注）と、（注）す、（注）。

（注）六、（注）位、（注）官、（注）人

沖湯 沖茶鞋 内監者トモモリテ先王ニカハカニ 一母接ニセテ願ハシ

脂燭松ノ葉 四位六位殿上人儀モホドニテツリ 相成テ以テモキヨクツル

朝餉 志大國ニアリテ宿民ノモノ志ナキニ任ズ
一ハ称号ヲ移氏ナリ

沖坂干鯛者内儀司 演鴻儀之 年盛高盛 沖厨子
所願高橋儀之

凡正月一日二日三日十五日 并毎月一日節儀年中

以上二十度儀之

濱猪典儀内子長内儀内卜一未女二未女等初之

屠蕪白散 丹波氏ニ六位ノ苑人ニテ

典藥類小表之内カ補款之

沖園 餅ノ一

擇吉日内儀月儀之

沖献

初献 二 三 一 對ノ屋一ヨキ中カイル

元日二日三日自女中方巡番收儀之次又

三献自高春不儀之三日乃也此

沖儀儀之儀

沖葉物之儀 シイ ナツメホシタ松ノミトリホシ

元日二日三日七日十日十五日 三春以上六日大隅大炊儀儀之

沖朝物

每朝川場乃新乃上之

日貢沖儀 ニラウカウ

毎日朝昼夕三度高橋未女正大隅大炊儀巡番儀之

年中毎日也此

小朝拜

近代毎年石込の凡有孝堂聖年三月一日迄の
之小朝拜時攝家初礼之、尚付少納相之義
実白右左大臣内大臣大中納言春議頭中将頭并
六位六位藏人等兼内出出清涼殿迄令奉進
列立北上方拜平之退、及晚之至及察立の
庭樟等被回日院相礼殿下相写也
元日節令

左大臣新八伴氏之キテハ
佐伯氏出長松小松
ヲマセリ

系陣人々

内弁 右大臣内大臣内大臣
大納言等
介弁 大納言等後
少納言 宣命等

次は 右大臣清中少納言

出御次第

地下詔司 清原ノ子駿ヲアケル
一本二送
女官 發上 次選 一采女 二采女 三采女
園司 女嬬 主殿司
大介礼
友智
少史
出納人
介礼友史生三人
中務省
木工寮
西宮小舎人五人

造御正 大介礼
少介礼
少内礼
内膳人
右大臣掌門人
大務省
押込寮 五人
主殿寮 五人

南堂主人

清士

内厨子所小歌

内膳司

大膳藏

产屋主

仕人三人

調進方

晴市膳 内膳司

答膳 大膳藏

庭棟

大櫃生炭

大令人二人

介记友役部与人

家女正

造酒司

内膳寮友人

修理藏

樂人 因栖三樂部之

晴市膳 内厨子所

杉木

慢

南殿并神掌灯

以上之役寮

轼并薦黄绿巾帖 越乃内膳物架道 以上掃部寮

出度并殿上掌灯 膳膳 以上出度

出插瓦南七 版 召使 殿上専 出納 小板友専 陣専

福物 以上大庭有

结打卷 本工寮 宣命代 圖書寮 打板 修理藏

布控 内膳寮 出系控 产屋主

見系祿法并仁奏出酒 初使 交右 宣命

二日

神拜

年中每於出神于清淨殿有出度及新出告之日八雲白成八

横家诸礼

一日二日三日除出表日有之 出示於相討 不系之

三日

掃家並内入自至掃出車寄お常法教之由献

昔ハ清涼殿ツ云
夜中殿日御座
有今ハ別ニアリ

院由幸始 但日限不定

親王由方由使始

法親王(由未廣一おづ)由進之
由使登夜勤之

至及祭ノトアリ由行水ノ
湯ノワカスヲ奉行ス

牛飼由礼

由牛飼(由一丸仙由丸跪候清涼殿西庭上月由自也
揺由簾頂而退出)

六日

由新始

お内由不系之由及由大工惣友木不勤之
修理職新始事

由板落始

役人及之役職更替始事自是始局終奏之

千束了歳

并様新

お清涼殿初庭上之

六日

七種菜

自水及水及献之

年献、由献

由卷新并自男辰由之

七日

由献 自由卷不依之

菜之由粥

由つこ由依之

白馬之由寄

由寄未始之由由心由神堀川并小治幣多所口由

刺友率看督長使丁大長由有礼人恩教之

作法

由寄

由寄介并由上調色由方由多由元日由依由人由内

樂由方由吏 与人

舞由非 与人

由右由弓由

由右由弓由

文殿 フダ
介記史生碑ヲ觀

内教坊 キヤウボウ

調進物

古碑 文友

御馬 二匹

八日

後七日中修法

在代南原真云院代法用赤古一長者自今日至

于十四日修之

大元御法

醍醐理性院抄本坊自今日七ヶ日修之

諸礼

或九日十日除中表計之 法親義門跡非文比且尼

中不写自長橋車券系因於常中殿中礼介松法象

院系法象非院人介松門跡院家諸寺諸山傍中

清涼殿

法礼

八幡檢校田中吾法与新吾法与

計持士

諸医中少所中礼

柳系家抄常中吾延中礼

十一日

祢文奏更始伊勢守古祢文更奏之

中澄法中日

河署梨中少折中持揚之

鞍馬富礼

鞍子僧來于寺橋奏者所捨之

十二日

賀茂奏更始

賀茂社之事奏之

出苑完

自十日十五日之間

十四日

年越之出苑如六月

冲波法河署梨系内也 清涼殿亦也加持

十五日

出苑

大隅大炊頭自出卷不依之

出書書丸義長

自山科及法敏之出清涼殿東庭也

十六日

踏歌節會

因年亦亦心元日并白馬

十七日

舞市説

清涼殿東庭也先之鶴危丁言橋大隅隔年初之

之後有舞市

十八日

出爆竹

清涼殿南庭也也之松菟催之也而人宿也陰陽

昨大思寫 雜之

大思松太史ト云子
陸陽作中夜アリ

女日

水献

水登所自男辰信之

女日

和歌古卷始

水日

護持僧之使

出門ノ三座之節之
花井門述好法院青蓮院

毎月水日六位院人小令人清士等給水本為護持僧
持系巡月水祈約之其月分渡之

年頭上使系内

日限不定水使高家記

日月能

何月之而高能時掃戸既調進之延薦以上之於暗
并女孺等常水敬有畏事了撤之

二月

一日水献

初献 自男辰信之

二献 三献 自水登所信之 毎月一日水献

上申日

春日祭

南都系向人

上心大中納言

并記

史并

史生 幼事友

召使

掃殿寮

大格職

大格有

侍士

調多物方

友幣 内庭寮

中棚

文杖 以上木工寮

貝糸弁記

上卿以下座 掃尸寮

友掌

主殿寮

内庭寮

左右弓寮

内庭寮

仗歌

氏内幣 内庭寮

檐持

續拍 仍弓友

長松 之殿寮 小松同庭掃

神位總管格 大格職

中馬 左右弓寮

祿綿 大格

十五日

温繫掛拍 北掛温繫像

院中内連枝方公家礼女中方掛之

中樂始

撰吉日仍之 中内所者汝汝祝王扮家簾中云々

海坂上人笑子樂人絶縁候人

内鏡法

中内中院中祝王等内鏡法於長持奏者不内鏡作

青法

廿二日

水家取及法乐和分内令是後寺羽院也志日也六月
同

廿一日

赤月次 和分内令

廿一日

聖廟以法乐和分内令

三月

二日

云献自出卷所作之

鷄合 清涼殿南庭云有之 取上人号献鷄

廿一日

日光例幣 神儀

上卿寺仍職奉系仕并大内記写系件

諸司

大内记

友務

少内记

少史

少内记

出納

主給

神友人

召使

大内省

主取寮

小舍人

掃取寮

弁记友仗部

調進物

奉幣

内冠大内省

隔年調進

勅文

陰陽頭

宣命料纸 出卷寮

宣命 大内记

友府

友務

取上卷 出納

献 掃取寮

神等

小坂野亭 以上大坂省慢 之及察

奉幣仗 恭儀 日光、兼白四月朔日、以發誓
日十二日奉幣納

三月

一日

更秋

南敷、出納、米、米、司史、生友、堂、等、等、任、清涼殿
出納、米、之、出納、拂、秋、寮、出、院、南、中、等、等、任、

中酉日

賀茂祭

サニウノルキニ
カシラニルニ (祖)

勅使、系、内、於、去、持、廊、賜、衝、重、勅、祿、陪、於、系、人、奏、
款、留、之、後、向、社、頭、

六月

冒

小坂郷、民、奉、ナ、友、會、高、蒲、ノ、苗

六日

初秋、自、冒、居、住、之、二、秋、三、秋、自、也、奉、所、借、之、

高蒲、出、殿

自、未、坊、城、殿、ナ、秋、ノ、三、内、坊、所、借、

高蒲、出、枕

自、新、屋、入、秋、ノ

六日

高蒲、湯、自、釜、殿、借、之、

六月一日

佐水餅

自之出敷菊苑種之注執之

和歌西舎

手向御乐 西乐始之日

少目出輩一

自今十月の三日内擇吉日注仍之注執少歌調色此中
同日色之

在燈梅

自十月の十日有法家并中六位諸人号執之十
少之件焼梅中退下于法家

十五日

也行之水指

小禊調色之此中同日進之

八月

一日

大平ノ黒ヤキカエノ内ニイル

竹小苑粥 月櫃司修之

田抄也注成

後嵯峨院ヨリ始 公筆根元ニアリ

此中法家法親之法家女中地下之輩ヨリ執種之
物各為也返也注成也下之

辰江戸也馬献上

左右司寮於清涼殿南庭侍天次

十五日

名月初就二献自男后修之入醴酒自仔与及注之
石清水八幡文致生會

先於殿上宣命養女上之納言大内記少内記内記

仕部卿少令人司系仍

右法外系局

上卿

弄

史

召使

左大馬尉

左大司寮

樂人

洞名方

友帶

十八日

祭儀

卯祀

友掌

左大正清府

左大正信尉

内司寮

宣命

之內祀
内司寮持系

御靈系

御献 水祓園令

九月

一日

自今日到十一日由神变依例帶也

備凡輕手被
不淨草不各

九日

三就自也卷不依之

也菊后

常以敬庭也菊後夕庭至陰陽所大忌初法事

十日

与天例帶

系陣人々

南堂	内親寮友人	小全人	栢敷寮	大亮省	津友人	出納	少内記	友督	大内記	参仕辨	上卿
戸倉主	使教	内監	主殿寮	右使	主給	少内記	少史	大内記	奉行職事	少納言	少内記

綱進方

宣命紙 宣命 内記

齊部代 松本三門王氏代 川越名存
大中₁ 大内記₂ 外記₃ 下₄ 上₅ 作名
ハテシ₆ アノ₇ カ₈ ケ₉ ト₁₀ ニ₁₁ サス
上卿₁₂ ト₁₃ テ₁₄ ミ₁₅ ナ₁₆ ス

小板方

以上
大亮省

取上₁ 取上₂ 取上₃

津丸

軾

造₁ 乃₂ 言₃ 察₄ 察₅ 察₆ 察₇

原田₁ 也₂
栢敷寮

慢 主殿寮

声相部

於神祇官者 古時 常奉造之時 告使 亦由職事

仁中

天皇出御于南殿有御深

神祇友系向令

上卿 少内記

辨 少史

少内記

全殿寮

使王

忌部

卜部

中侍

掃部寮

右使

左右少寮

左使

主簿

綱進方

奉幣

大禮者
内務寮

滿年綱進

官符友勢帷

口代

案木之寮

幔

及寮半等

小庭薦

掃部寮

伊勢系向

中侍祭主

使王

忌部

清士

十三日

名月古紙写如八月十六日

十月

一日

今日撤装出御祭束政を所約若未主候如月一日

亥日

六ツクノト云フアリ小サキヨミテ餅ヲツキ給フ也。神嘗月何處の雨の足ヲトニ
ニヤリノ事カクツクノト唱テツキユフニ天子臣下モ同シ

三献自出卷而信之

又清士去丸献餅丹波玉野津御抄卷合献之

餅ヲ折ニ入レテ
献

十月

一日

供郁子 近江國言為那ヨリ信之

子祭

口过友被弹第 三 六 琴十三位

上申日

春日祭 二月

中卯日

新嘗會

於吉田友 八 乃之 神饗之 衣蒙自禁裡 出料出

十二月

八日

信温糟粥 アツキカユ ぬつ さきより 潤色之

内侍而此 神乐 擇吉日 出乃之 本末 物子 有秋 琴

仍人々 持明院 友庭 回友 續小 乃及 本園 友 出过 友

出初之

在防后入

和琴 口过 笛 算 策

心上 乐人

行事所

修 理 儀

潤 色 之

神 依 内 祝 寮 帶 浅 当 查 寮 帶 岸 出 納

脂 蛙 掌 灯 出 納 三 乃 木 南 史 置 筵 乃 他 拂 於 从

松 明 幔 坐 与 友 寮

出 棟 拂 擇 吉 日 初 秋 出 乃 之 乃 依 之

二 献 三 献 出 卷 而 乃 依 之

第 与 友 寮 同 柄 乃 他 潤 色

人 長 不 作 陪 徒

サカキノ 格 洗 代 二 柄 ヲ コシラヘ ツケテ 舞 也 樂 今 中 二 人 長 アリ

出 納

常清教 友上人 此經人寫

水銀側 侍男 清士 勅之

清淨教 於清士 內之 印柳 清士 勅之

左發上 年中ノ御髮ノヲチヲヤク

於清士 友友人 清士 寫勅之

節分

初献二献 寫大隅大炊 政兼 自男 居依之

大食拍事

常清教 向常内 侍清士 所 山玉 對座 清所

仕下 臥拍之

立春

云献 自男 居依之

水清 依之 水清 依之 水清 依之 水清 依之 水清 依之

如元日

於日

大陽 登及 依之

清清 後 於内侍 而 希危 去回 及 如行

禁中 年中 行事 略 尾

前七

正德三年秋八月二日急寫之序若此在本書他日改政之

情形主人相國平秀成所為

右年中行交略以相國氏本今寬政十一巳未年三月甲

辰益城郡藤山邑中亦山林字之 寺本湖岸直隸判

于時文政六癸未年自四月五日起毫同六日終之

中村 萬紀直衛

和也朱の如也今未正也加

林平年中行事略終

董菴錄卷之百六終

董菴錄卷之百七

御即位次第無叙位儀

前一日裝飾紫宸殿一如元會儀

當日早且有御湯殿事刻限大臣着陣

召官人令敷軾

次召大外記問諸司具否

次召大内記覽宣命草入

大臣覽畢返給無草奏

次内記進清書宣命

大臣見畢置座前内記退

次以職事奏聞即返給

職事退

次召内記令持宣命内記留立小庭

次召官人令撤軾

次大臣起座向休幕內記相從大臣入休幕仰

可送宣命使休所之由於內記此間褰

帳左女王右典侍向休幕

次執柄率公卿見南殿御裝束先是諸衛服大儀各勤所部立大儀伏於前庭

左右衛門居兼明門代腋左右胡各用中務省輔宰

內舍人等左右相分陣近衛南

左右大將代已下率所部陣中務陣北謂之華標陣

近衛次將已下着挂甲帶弓箭陣南階東西着胡床

內藏大舍人大藏掃部主殿等官人取威儀物

列立左右華標陣北

主殿圖書兩寮各服禮服列爐東西

諸儀辨備畢

內辨於休幕着禮服北間外辨御相已下着帷北上

次典儀着禮服率贊者二人各就版位遲々時執柄催之東西

次六位外記申諸儀辨備畢之由於內辨

次內辨着帷兀子

外記史着內辨帷後床子

次兵庫頭着內辨帷南床子

次內辨仰可擊裝畢鼓之由以外記仰近衛官人

官人出閣外告之

次外辨上首召召使二音召使稱唯立帷前

上卿宣兵省召召使退召之

兵部丞進立帷下
上宣裝畢鼓令擊

皇稱唯退召兵庫鼓師仰之

次擊外辨鼓九下諸門應之殿下鼓不應

次開東西腋門

次伴佐伯居兼明門代左右胡床

此間 天皇着御礼服可然公卿奉仕之

職事納御礼服於平櫃蓋持參之

執柄伺候可然公卿候御前

次有御手水事

陪膳公卿

次被御堂上行事辨二人此間執柄立高御座壇上

催行雜事

次執翳女孺東西相分着床子

次褰帳命婦二人着座

左女王 右典侍

次威儀命婦着座

次左右方侍從代及少納言入自東西階昇堂上各

出南榮揖而相折至南庇東西第二間相揖

北行入楹內立櫃上相對而揖

次伴佐伯兩氏立門下

次開門

次兵庫頭進幄前召刀祢鼓可擊由申之

內辨宣令擊

兵庫頭召鼓師令擊之諸門鼓皆應之

次外辨公卿依次立帷座入自兼明門代著標異位

此間隼人吹三節近代其由計歟

諸伏皆起

伴佐伯降壇北面立

次執柄以職事問吉時於陰陽師來申剋已至之由

次天皇御高御座

始自後房今度被用清涼殿至于高御座後階下敷延道

執柄候御簾

御前命婦左右相並前行

次內侍二人相並左右前行持左劔右職事扶持之

次宸儀進行延道上他人不踏之

執柄候御後

藏人頭取御笏宮相從

御前命婦留立高御座後男柱下

內侍已下自後階候帳外壇上

宸儀著御高御座

藏人頭褰御帳後帷

內侍昇北階自御帳東置劔於御座左方

又一人如前參進置壘於同所退下

或著御已前置之

次執柄取御笏獻之

次藏人頭置御香於階第一級

此間御前命婦引退候北庇

次執柄着御後座或居高御座中層

次執柄立第三層行事

次兵庫頭起座褰御帳鉦可令擊之由申之

內辨宣令擊

兵庫頭召鉦師令擊之三下

次女孀六人執翳右手執翳左手差扇自母屋

東西一間斜南行出南榮入自御座間與

母屋柱平頭立長中短翳次第列後皆北

面立左右共如此左右行事辨相副行事

次褰帳二人起座昇高御座東西階進立南面欄內

褰帳畢後座

次執翳經本路退後座先下竊

宸儀初見

諸伏稱警

式部稱面伏近代不稱之

群臣磬折內辨不立

諸伏兩氏共居

次主殿生火圖書燒香

次典儀稱再拜

贊者承傳

群臣再拜武官不拜

次宣命使就版諸伏起

宣制三段

初二段再拜後一段拜舞

此間武官俱立振旗稱萬歲近代其由計

次宣命使後列諸伏居

典儀唱再拜

贊者兼傳

群臣再拜

次左侍從代參進稱禮畢退立

次兵庫頭起座垂帳鉦可令擊之由申之

內辨宣令擊

兵庫頭召鉦師令擊之

執翳參進捧翳如初

次褰帳參進垂帳其儀如初

諸伏稱蹕

褰帳執翳等後座

天皇還御本殿如出御儀

執柄充賜御笏藏人頭持之

藏人頭獻御香

次兵庫頭起座召稱退鼓可令擊之由申之

內辨宣令擊

兵庫頭召鼓師令擊之

殿下諸門鼓皆應

次外辨退出

侍從退下

褰帳威儀執翳等退入

次內辨退出

群臣退去

伴佐伯閉門

諸衛擊解陣鉦五下

若及昏者至殿寮入自東西當爐北頭炬火
殿上不舉燈

案四月十日 中村直衛

御即位諸役目錄

内辨

左大臣

大炊御門大納言

久我源大納言

難波中納言

櫛笥中納言

新宰相

新宰相中將

左

右宰相中將

樋口基康朝臣

右

日野西宰相

擬侍從

少納言

宣命使

典儀

左近衛府大將代

中將代

少將代

右近衛府大將代

芝山重豊朝臣

長谷範昌朝臣

代石井伊忠朝臣

櫛笥中納言

東坊城長誠朝臣

平松時行朝臣

將監紀宗保

將曹拍則安

外山光任朝臣

中將代

少將代

近衛次將

將監多忠充

將曹泰光武

左西大路隆康朝臣

大宮英太子朝臣

大原榮敦朝臣

右植松賞雅朝臣

庭田重熙朝臣

在秀朝臣

少内記昌範

内記

中務省

泰孝

少弼盛行

大弼直行

頭代清光

正清光

重成

職秀

橘蕃術

藤井重好

藤原定季

藤原俊白

伴嘉亨

佐伯常俊

兵部省

兵庫寮

集入司

開門

贊者

燒香

生火官人

左衛門府

右衛門府

時申陰陽師

大丞章敦

大尉隆弘

秦邦朝臣

御即位

内辨

外辨

左大臣

大炊御門大納言

久我大納言

難波中納言

櫛笥中納言

四余宰相

東園宰相中將

親王代

^左今城宰相中將

^右日野西宰相

擬侍從

^左樋口中務太輔

基康朝臣

^右芝山兵部太輔

重豊朝臣

少納言

長谷少納言

範昌朝臣

石井侍從

行忠朝臣

典儀

東坊城少納言

長誠朝臣

大將代

平松侍從時行朝臣
外山左兵衛權佐光任朝臣

次將

^左西大路中將隆康朝臣

大宮中將英季朝臣

大原少將榮敷朝臣

植松中將常雅朝臣

庭田中將重熙朝臣

坊小路中將公文朝臣

行事辨

廣橋辨兼胤
甘露寺辨規長

傳奏

德大寺大納言

奉行

柳原辨光綱朝臣

御即位宣命寫

現神止大八洲國所知須天皇我詔旨良万宣布
勅命乎親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞
食止宣布掛畏岐平安宮尔御宇須倭根子天皇
我宣布此天日嗣高座之業乎掛畏岐近江乃大津乃
宮尔御宇須天皇乃初賜比定賜倍留法隨尔被賜

臣仕奉仰賜比授賜布恐羨受賜利進毛不知尔退
毛不知尔懼羨坐止佐久宣布大命乎衆聞食止宣布
然仁天下治賜倍留君者賢岐輔佐乎得也平久安
久治賜布物仁在止奈所聞須朕雖薄劣親王等
乎始臣王臣等乃相比奈扶奉乎事尔依臣食國
乃天下之政者平久安久可有止奈所念行須彌以
忠信之心臣天皇朝廷乎衆助仕奉止宣布天皇我
勅命乎衆聞食止宣

享保二十年十一月三日

奇藤藏本寺本、癸未四月十日字之

中村直道

享保二十年

仙洞第一皇子御母新中和門院尚子近衛家熙公女

今上皇帝

昭仁

御十六

東山院皇子御母新崇賢門院隆子柳筭内大臣隆賀公女

仙洞

慶仁

御三十五

自是以下親王家及親王門跡姬宮方比立尼御所攝家門跡且享保二十年春閏日殿下以下公卿大夫有補略依繁多故畧之

于時大政六癸未其四月十日以寺本氏藏書寫之

中村 萬喜直衛

江村保純(肥後) 津川平兵衛(肥後) 方活紙四写

上色

寶書

去之

是志述之流、少披見之以下、
冷島書付之紙子、潤然、

費

一 御即位繪卷

去之

六段

御即位繪卷末上初の先例、遂に承金、
中武家、少時、自松平、有人、守、
中武家、少時、自松平、有人、守、

借以成武松部少將也。其相國之親也。法也。其也。
少家親之。成又引進。法方也。其也。其也。其也。
而月其少松。松別。法也。其也。其也。其也。其也。
借二松部。少將也。其也。其也。其也。其也。其也。
おし色も。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。

少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。

少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。
少なり。少松部。其也。其也。其也。其也。其也。

十月十五日

年長馬ノ様

江村松純
武松

直道... 江打... 京八... 西... 京...

董菑錄卷之百七

文政六年四月十日

中村直道

董菑錄卷之百七

薰菑錄卷之百八

中村直道輯

大和豐秋津鳴卜定記

平京波未深山乃時與利既仁帝都乃勢自良備波利
 誠仁日本乃中心國中秀天下無雙之勝地奈南波晴礼北波
 塞利東波流水有天福壽延長之謂弘顯之西長
 木山並北連礼四神相應弘為寸然波四方四隅仁靈
 神並御座天之代代乃固仁奈豆氣利古仁八十萬神等
 天高市仁集玉天神議仁議給天可遣神弘尋出
 之奉利此國陪鹿島仁座寸武雷乃神撤取仁座寸
 齊主神弘止下之千早振惡神弘悉皆伏世順陪奉利
 遂仁報申壽此後皇孫天石座放于天乃八重雲乎

稜威乃千別仁千別天武甕槌經津主弘左右仁
漆奉五天鈿女命波盤樟船弘漕奉利皇孫弘神
代乃浦乃浪靜留儀迄送利御座之仍五天神與
賜之三乃神寶弘以互此國乃主止成良世玉波北
山乃麓仁應化之百王弘守利玉布經津主武雷
神母同此所仁社垂跡之玉陪去波王城乃丑寅仁
當天一乃山有利神代乃昔與天七地五神此山仁
影向之玉波無之即今日故之宮是奈先大宮止三
諸乃神止同奈二宮止申奉波天地二儀乃主神止云
事仁國常立神皇產靈乃御神也聖真子和吾勝
尊奈益陰陽兩神乃其中仁出生之玉仁依天聖止
申神也兩神乃真乃中與出玉布故也八王子止波國

國狹立乃尊也容人止申奉波伊弉諾尊也十禪師止
申奉波十波七代天神地神乃三瓊々杵合天十也禪
止波讓也師波國也言波十善天子仁師弘讓利加護乃
義有利三字波惶根尊也此外尊神來臨乃事有止
雖母彼家仁沙汰有事奈次仁西谷峰上乃柱波是
即神代乃昔陰陽二神巡利國中乃御柱止云者奈天
御柱波一氣顯現乃起利萬品惣持乃源奈天乃四德
地乃五神弘象利又五色乃絲弘以天奉纏利八重乃
神弘以天奉飾留是伊弉諾伊弉冊乃鎮座陰陽變
通乃本基諸神化生乃心基也都合天心天木德弘
興之皇化仁歸天國家弘助介故仁皇帝數乃天下
弘經玉止母常磐堅磐仁之勤奉無久三十六禽十二

神王王八大龍神常仁守玉仁依天損失有波天下必
危事利次仁東谷今乃樂師堂乃山頂波與母大日本
三千界出生給天浮橋乃上仁立且瓊茅弘指下玉天
探玉之時一滴乃凝成留自凝島止云波此所也其立
玉之浮橋波止今乃日枚乃岩河橋止云者利諸人此橋弘
渡仁必香弘脫事波此故利次此山乃麓仁高野止云
所利天照大神乃別宮也夫此山波昔天照大神天
磐戶仁入居玉時仁八百萬神等深久哀愁且磐戶
乃前二天神樂於奏之天子八祢命於以天藤木諱辭
竟奉年志並仁天子力雄神戶側仁隱立天常世長鳥
鳥於集且長鳴世之玉陪天神母感玉比岩戶於細
目尔開給波多力雄神引出奉之與再常暗乃雲

晴奉利其竈玉之岩戶片圍和枚弃玉布時落天今
乃西石座止成利其片圍波今岩倉乃里仁留利又長
鳴鳥於集天令鳴玉布所於長谷止云比又神樂於奏
之申所和列衣雷神出現天之分奉留今乃吉田山是也
彼八十萬神集玉所和如意峰利今母六一乃日每
仁每月六度和列金剛山城列愛宕山同如意江州
日枚向列高千穗此日本五岳也此五岳利與如意宝山
陪神達集會在天神代乃神樂於奏玉利次仁成
亥仁當天王都守護神明座寸即天神弟七陰神
奈火災於永久退年為也天若宮和火產靈於置玉
奈偏尔帝都靜謐乃基也東仁當天鴨御祖乃鎮
座有利此明神和彼六一乃每日仁如意峯仁集給

神等仁事勝神止相共仁百乃味乃御饗於調天
神樂乃奏有波允深重乃御神奈殊仁久家三井
乃社同久傍仁御座波帝京何乃危事有年次仁又
丙仁神明鎮座之玉布此神波地神弟四神也此京
於保玉年為仁日向乃國利與來臨之玉布故當社仁龜
於以天使者止定事波昔火酢并命止幸易給時海
邊仁吟比玉陪塩土老翁頭出天無目片間乃小狐於
作天字奈乃底仁深久入礼遂龍宮乃玉乃殿仁到玉
天三年乃比留利玉天其後上津國於床敷思食天歸年止玉時海神火
龍仁乘奉豆歸玉陪其利與當社乃使者止定也其後
天武天皇乃御寓仁天利與靈至降此仁帝都乃守
符仁定女奉年止又此社仁母納玉也尚深重乃秘事

奈礼今不載寸又松尾止名介奉事和灵至降下乃
波利與也彼教之老翁母小塩乃山仁影向利奈次帝居乃
未申尔當天第三乃瓊々杵乃后宮木花開耶姬神
同父大山祇並仁瓊々杵火々出見乃神達鎮仁守
利玉布其誓常仁婦乃產仁最惡木更於怒玉天
偏仁如此人乎助玉利彼開耶姬和酒解子神社利奈
大山祇和酒解社也瓊々杵和今乃若子宮利奈小若
子社古火々出見尊仁渡世玉也次仁辰巳乃方仁當
天倉稻魂乃垂跡有利夫此神波百穀於播玉布故
尔名介奉留神代乃昔利與此峯尔向伊玉母不知只
三峯仁顯玉祇人皇四十三代元明天皇和銅四年
辛亥二月十一日仁垂跡寸誠仁諸人哀憐乃御心

深久蒼生乃作年物波草乃片葉未天百乃災於棟玉
伊刺隨身乃室於安久保事母皆此神熊奈礼誰
賀此神於踈久世次仁城南仁當和地神第四乃
皇后豐玉妃乃廟有利加之天孫乃御傍仁助奉
止盟之天兒八祢命又外戚高皇年崇日神並御
座波惣社玉籬内乃名有利此如國中仁成出年族
若又此國乃道於踈之奉波承久神明乃御心背
奉年耳

瀬見小川乃清木流乃御世仁和久良和仁成出奉
利布理仁志神代乃言乃葉於筆奈良寸葉何和賀跡
仁殘良年墨奈羅寸葉散天志呂使於後仁寸事
有年加賀留於材短木弥津嘉連良未天神垣仁

木綿取志天傳奈流理鳥知利清和井乃水遠抄
母鳥和鳴止天識毛皆古木詔遠鳥乃跡不殘和誰
賀其深更於弁年吁太神哉乎

永正元 甲子年 五月廿八日以御本書寫畢

藤原朝臣 判

天文二十三年甲寅歲以藤紵言御本寫之

右以山城各勝志名跡志等所引比較年

右以群書類從卷廿三神祇部寫之

天保七 丙申年八月二十九日

中村直道

薰穢錄卷之百八

薰穢錄卷之百九前

中村直道輯

大日本國一宮記

鴨大明神 號下社大山咋父故號御祖又曰亂宮大已貴命也

賀茂大明神 號上社大山咋神也號別雷母玉依姬武甕槌命女

三輪大明神 號大神大物主神大已貴命也父素盞翁母稻田姬

平岡大明神 號牧間神天兒屋命也又於奈良春日第三殿祭之

大鳥神社 日本武尊也

住吉神社 底筒男中筒男表筒男三坐後加神仍皇后四坐也

敢國神社 號南宮金山姬命也

都波岐神社 猿田彦神也

伊射波神社

山城愛宕郡

大和城上郡

河内河内郡

和泉大鳥郡

攝津住吉郡

伊賀阿拜郡

伊勢河曲郡

志摩答志郡

真墨田神社真清田大明神此也大己貴命

砥鹿大明神大己貴神

已等乃麻知神社號事任神猿田彦命

淺間大明神號富士推現大山祇女木花開耶比咩

三島大明神大山祇命

淺間神社同富

寒川神社八幡也

氷川神社素盞

安房神社號洲崎大明神太玉命也

玉前神社高皇產靈弟生產

香取神社齋玉命也於春日第一殿祭之

鹿島神社武甕槌神春日第一祭之

尾張中島郡

參河寶飯郡

遠江佐佐郡

駿河富士郡

伊豆賀茂郡

甲斐八代郡

相摸高座郡

武藏足立郡

安房安房郡

上總埴生郡

下總香取郡

常陸鹿島郡

建部神社大己貴命也三輪一休

南宮神社金山彦命也

水無神社大己貴命女御歲神也

南方刀美神社大己貴二男建御各方刀美命也

校鋒大明神經津主神也

二荒山神社大己貴命男事代主神

都々古和氣社大己貴男高彦根

大物忌神社倉箱鬼神也

遠敷大明神号若狹彦神上社彦火々出見下社豊玉姬妹玉依姬

氣比神社又号筭飯宮人皇十

白山比咩神社下社伊弉册尊上社前理媛号白山權現

氣多神社大己貴命

近江栗太郡

美濃不破郡

飛驒大野郡

信濃諏訪郡

上野其樂郡

下野河内郡

陸奥白河郡

出羽飽海郡

若狹遠敷郡

越前敦賀郡

加賀石川郡

能登羽咋郡

氣多神社同

伊夜日古社饒速日尊皇子
天香久山命也

渡津神社大己貴命兄五十
猛神名大屋彦神

出雲社大己貴命妻玉穗津
姬也父高皇產靈尊

竈神社一名竈守權現
住吉一休也

粟鹿神社上社彦火々出見中
社竈神下社玉依媛

宇倍神社武内大
臣也

倭文神社大己貴命女
下照媛也

杵築宮大己貴命
素盞島命

物部神社饒速日尊皇子
宇麻志摩子命

由良比咩社大己貴嫡后
須勢利媛

伊和神社大己貴
御魂也

中山神社同

吉備津宮孝吳皇子吉備津彦命者非也孝吳三世吉
備武彥命也備前倫中倫後三國一宮也

伊都岐島神社天照與素盞島誓給
生三女内布杵島姬

玉祖神社伊弉諾男
玉屋命

住吉神社底筒男中筒
男表筒男也

日前國懸宮天兒屋孫
石凝姥

伊佐奈岐神社賀多
賀社

大麻比古神社猿田
彦神

田村社同

大山祇神社

都佐神社高賀茂大明
高賀高彥根

宮崎宮八幡大神二聖母神后
三竈門号宮崎八幡

越中砺波郡

越後蒲原郡

佐渡羽茂郡

丹波桑田郡

丹後與謝郡

但馬朝來郡

因幡法美郡

伯耆川村郡

出雲出雲郡

石見安濃郡

隱岐智夫郡

播磨完栗郡

美作苕東郡

備中賀夜郡

安藝佐伯郡

周防佐波郡

長門豐浦郡

紀伊名神郡

淡路津名郡

阿波板敷郡

讚岐香川郡

伊豫越智郡

土佐土佐郡

筑前那珂郡

高良玉莖神 武内宿祢

宇佐宮 應神天皇比賣神 大帶姬吾朝宗廟

西寒多神社 大分宮宮崎同体 又名炸原八幡

與止日女神社 伯母神功皇后妹也 号河上大明神八幡

健磐龍神社 人皇十二代景行帝 御出現阿曾都彦也

都農神社 大己貴命

鹿兒島神社 号大隅正八幡宮兼 右云神功皇后也

和多都美神社 号牧開神社塩土 老翁猿田彦神

天手長男神社 天思兼 神一男

和多都美社 八幡宮也

右諸國一宮神社如此秘中之深秘也

右以屏書類從三十三神祇部字 西中九月朔日 中村直道 薰箱錄卷之百九終

筑後三井郡

豐前宇佐郡

豐後大分郡

肥前佐嘉郡

肥後河籾郡

日向兒湯郡

大隅柔原郡

薩摩額姪郡

壹岐石田郡

對馬上縣郡

薰箱錄卷之百九後

中村直道輯

北畠准后親房卿

一大小社差別事

大政官符 神祇官并五畿七道諸國司

應早定置天下諸社大中小神殿雜舍瑞珠垣 垣

鳥井并四至内地町數事

正一位正三位以上為大社

從三位從四位以上為中社

正五位從五位以上為少社

一大社四至限九町

三間檜皮葺正殿一字 高一丈二尺在 板敷戶一本 堅魚木八尺五

九尺徑 千木四支 長一丈 三尺 瑞垣一重 方二丈 高七尺 內外
 鳥居二基 內一本高九尺 口徑八寸 外一本高一丈 口徑九寸 三間檜皮菅幣殿
 一字 高一丈一尺 在板敷戶一本 五間草菅拜殿一字 高八尺 五間
 板菅直會殿二字 高八尺 萱菅板倉二字 三間草菅
 屋二字 在戶二本 左右板菅廊二字 各高七尺 五間外舍二字
 尺高八 五間廐二字
 一中社四至限八町
 三間檜皮菅正殿一字 高一丈一尺 在板敷戶一本 堅魚木六丸 長四尺 徑七寸
 千木四支 長一丈 方二丈五尺 高七尺 珠垣一重 方三丈 高五尺
 八內外鳥居二基 高八尺 徑七寸 三間板菅幣殿一字 高七尺 戶一本
 三間板菅拜殿一字 高七尺 五間外舍二字 五間板菅
 舞殿一字 高七尺 三間板菅直會屋一字 高七尺

一少社四至限四町
 二間板菅正殿一字 高八尺 在板敷戶一本 堅魚木四丸 長四尺 徑七寸
 千木四支 長八尺 瑞垣一重 方二丈 高五尺 鳥居一基 高六尺 徑六寸
 三間草菅拜殿一字 高七尺 三間板菅舞殿一字 高七尺
 尺 五間雜舍二字 同尺
 右被左大臣宣稱奉勅諸國神社正殿雜舍并四至町數所定如件宜仰在國司以正稅物數令造進自今以後不可遠失若有破損者應令社司修造無其勤者科大被解却見任官宜兼知依宣行之符到奉行

寶龜二年二月十三日正四位上行左大臣兼右兵衛督藤原朝臣 百川
 左大史外正六位上阿倍志斐連 東人

一造宮制度

倭姬命世紀曰皇神託宣久其造宮之制者柱則高
太極則廣厚禮是皇天之昌運國家之洪啓古止宜
助神器之大造奈利即兼皇天之嚴命天移日少
宮之宝基造伊勢兩宮焉

府錄曰造宮義則大禳天女倭姬命兼皇天之教
命移飛宮天宝基而興神籬於神風伊勢五十鈴原矣

麗氣曰内鳥居金剛時春天外鳥居金剛時秋天内者按

秘密灑水神表沐浴懺悔也外者解捨被神除穢惡
不淨也

天口事昏曰二所太神宮左右東西宝殿前後不同
儀内宮阴神外宮阳神坐也是春夏象阳長於万物

前秋冬象阴藏万物後所謂天地之位聖人之法在
前在後象四時治天下以事理此其儀式也

千木片揆者阴阳之表也堅魚木者星象坐其數
十九者大日靈尊照十方誓也九者五大成身尊

光濟八洲群生光明表也八者八心德明表也七
者七星頂坐守護願也六者六根明也五者中府

五魂濟也四者四德表也三者天地人表也一說
云十者十地之位表也九者極上之位表也天四

德地五行爲九也九者五方四維九州曰九之故
爲九々八十一數極也宝基本紀曰千木者智義
也搏風也義者仁也如天智則靈也如神風者氣
也夫天地之間非風則不行不動故神聖乘風雲

而住行冷然善乍有風竅是則虛空之中無聲
而独能聞知焉無形之中能露心矣實有之衆
之所集至能一大道之竅也千木片揆者水火
之起天地之象也故則日天之智儀也片揆者
仰以開口斯受月天之一水利万品緣也任水
化豐受太神乎波号御氣都神也向上天神開
口而向下也是阴阳化能也堅魚木者木者衆
星像也奄守天下比於列星也人氣昇天為星
善氣則為善星惡氣則為容星也能善无容惡
起也鞭懸者天神地祇之風光衆人之壽命國
之權衡民之轡策者也故以為名矣御門鳥居
八洲之中四方中以西方為智門也故以西方
号鳥居也大地清淨心緣也謂阴阳之原乃遂於
大明之上出入於窈冥之門而君臣上下令道適
清淨之宮殿焉瑞垣玉垣荒垣者天四德地五行
万象六位五友皆備矣惣天地與人形々々與寶
舍雖異其名而其源一也

右造殿儀式非無疑然傳世久仍始載于此矣

右以群書類從卷二十六神祇部書寫之

中村直道

芝蔴錄卷之百九後終

薰箱錄卷之百十

中村直道集

東家秘傳

北畠准后親房卿

日本書紀者藤原朝廷天津足根大父天皇御宇一品親王奉詔所制作也上始混沌未分之昔下終人皇四十一代高天原廣野姬天皇之御宇古來讀此紀者或秘而絕其傳或暗而失其致故欲明用心之道識理世之術者迥訪印度之釋典遠決支那之書史耳予久覽我國之舊史粗了此道之所在天地造化之根元神皇授受之因起其理玄妙其詔明白檢此於異域之道果然無秋毫異凡厥陰陽之理造化之端自始至終無離五運五運消息終而又始當與

天壤無窮者蓋此道也是以粗據神書之明文敢聊
勒愚管之所見文不筆削立心為致都十箇條命曰
東家秘傳矣

天地未割名渾沌也

渾沌者天地未割之理一物未生之前也

解曰一物未生ノ前ナレハ可字之處ニモ非ス可
象ノ形モ無如鷄子溟滓而含牙凡云猶浮膏而
漂蕩凡云猶海上浮雪無所根係云且取喻雖論
之實ニハ有形体トト凡不可言之有對無名無對
有稱也有無ヲ離テ名字未立時ヲ渾沌云ヘシ然モ
此渾沌位ニ五大ヲ具定萬德同備セリ一顆ノ珠ノ
中水火ノ二德ヲ具スルカ如シ此珠ノ体ヲ見ニ都テ

一物ヲ蓄ルトハ不見若日月ノ光ニ遭トキハ必火ヲ生
ス然ハ乃此珠天然トシテ含水火ト云トハ得可知
渾沌モ又如此也又物未生ノ時儒典ニハ元氣凡大
極太一凡云ヘリ此元氣ハ如露シテ六合ニ充塞ル
此中ニ水火ノ二德アリ是身心ノ根元也露ノ濕
生ハ水也水ノ体ハ圓也露ノ中ニ含靈ハ心也火ノ
体三角ナルヘシ其清陽ノ氣ハ薄靡為天重ノ濁氣
淹滯為地凡云リ清陽ナルハ乃火ノ氣也上リ升ルハ
火ノ性也下リ降ルハ水ノ性也今此渾沌未分知ハ
立心者大ナル象也苟モ其道ヲ得ツレハ天地ニ先
テ造化ニ主タリ我國ノ神代ヨリ此道炳焉タリ
全ク内外ノ典籍ニ關カラス知與不知言與不言

ナリ抑此渾沌所具ノ水火ノ二德委クスレハ五
大也上轉下轉ノ二ノ用アルヘシ下轉スレハ空風火
水地ト次第シ上轉スレハ地水火風空ト生起ス無
端如環相攝レ如珠志道者更ニ問ヘシ云云

渾沌之形譬如雞子也

雞子者純圓ニシテ無端譬合身者云ハ天然而遂陰
陽之稱也

解曰未分ノ理ヲ渾沌ト云已分ノ氣ヲ陰陽ト云陰
陽ト云ハ水火也故性具ニ約而圓ト云ニ無錯三角
ト見ルモ不差彼圓ト三角トハ元來□体上變相也
三ヲ圓トシ圓ヲ三トス其中間ハ團虚空ノ相トス
故知ス空ニ三ト圓トノ三德アリ依之水火ニ用ヲ

施ス也又圓ハ兩箇ノ半月也半月ハ風氣往來ノ
形陰陽ノ氣往來シテ水ヲ生ス此時ニ一圓相成
ス此ヲ天ノ形トヘリ又三角ノ火性ニ自陰陽ノ二
德隨憂恚心トナル是故ニ男女アリ然ハ乃男女ハ
一心ノ所變ニシテ本來ノ二ニハ非ス彼ニノ三角ヲ
合テ一ノ方形ヲ成ス方ハ地ノ形也天ハ圓ニシテ
物ヲ覆德アリ故圓蓋云地方ニシテ物ヲ戴德ア
リ故方輿云方圓ノ二法ヲ以テ天地ノ初トシ萬
物ノ所依トス渾沌ノ處ニモ自然圓形談スト云凡
先後ニ亘天地已分ノ後ニモ地方ナル對シテ天ヲ圓
ト云也密教ニ天地曼陀羅ヲ建立ス其義全同方
形ハ萬物造化ノ上ニ各天真ノ理ヲ通シ圓相一物

未生ノ前ヨリ無始無終ノ心ヲ表セリ神道ノ玄

^{第三}妙言語道断ト云ヘキニヤ深秘云云
陰陽初判一物生中也

及其清陽者薄靡而為天重濁者淹滯而為地精
妙之合搏易而重濁之凝竭難故天先而地後定
然後神聖生其中焉

又曰天地之中生一物狀如葦牙便化為神跡國
常立尊

解曰天地ノ名言ハ縁底起ルヤ是ハ自然ノ尊理情
識所不測也萬物ノ名言モ又如此ナルヘシ若漢去文
字ニ約シテ義ヲ立ハ一大ヲ天天至高シテ無上ノ
義也去也去地云去ノ二畫ハ地ノ德下可又地上地中

ナリ万物之形氏ヘリ天ハ他年切地ハ徒二ノ反其
從來ハ不可得而知理也故從此已往ハ儒書不明
之我國在人民以來天ヲ阿麼云地ヲ毘居云又ハ
都知云便是自然ノ理ヨリ如是名言トナル然
釋典旨符合シテ甚深ナル義漢朝ノ説ニ勝レタリ
更問阿ハ寂初二開口聲也諸音四十七皆此聲ヨリ
轉生シ万物造化スル元也有情非情皆此德ヨリ
現成此天地相分根元數ヲ以可知也混沌初分テ
即天上下知是一氣初テ生ル也是陽ノ道也奇數
ニ相應ス奇ハ其性ハ水也當体ノ水ニハ非ス故其清
陽氣ハ上リ升テ上ニ在水性ノ上清陽氣アルニ若方取
北方也已ニ一理アルハ二隨テ自在之其二トハ

方即地ニ知是陰ノ道也偶ノ數ニ相應ス偶ハ重也

濁ルノ氣下降テ下ニ在若方ニ取ハ南方也其性ハ

火也當体ノ火ニハ非ス火上升ル聲アリ然而地ニテ火

地中ヨリ火生ス目前ノ造化天然ノ道理ナリ凡一二ハ不離ノ法水火互具

ノ德アリ水ノ中明ナルハ火也故字ヲ造ル元三也

火中ノ昧ハ水也故字ヲ造元三也下ニ可如是道理ニ

依テ陰陽ノ道互ニ升降シテ天ト成地ト定已ニ上

下ノ相分トナラハ中有正ト又可知之故ニ天ノ三

道出生ス而シテ此中位ハ空也一ヨリニテ生ニヨリ

三ヲ生シテ天地ノ道極故大極之一ハ函三云リ内

有空不生空假中等義皆是也假令ハ横ナル一ヲ立テ一ト成是一動也

又一轉シテ一ト成セリ元來ノ横一ニ反テ然其意ハ

大ニ異也萬物ノ理皆如此ナルヘシ今此天三ノ空中

ニハ何物カ主タルヘキ此ハ是風ノ所在ト可知也此風

ハ非從外來元來ノ相分即是風ナリ水用ヲ施又

風萬物造化又此風也故風ヲハ地四ノ位ニ居テ四

方ノ位ヲ定ヘシ已ニ四方ノ位ヲ成タレハ其中央ア

ルト可知是ヲ天五ノ位ト云此位ヲハ地トス當体ノ

地ニ非ス所居約地ト云如此ニ五位成テ水火空風

地ノ五大ト云又此中央ノ五ハ竅後ニ出生スレ正四

方ヲ統領スヘキ道理天然也密經之深義此等ノ說ニ

天ノ位ニ習也天一ヲ天皇天帝ト習フ義アリ更問之如此次第ハ造化ノ初テ一往

ニ計也五ニ至留ル通計スレハ一十五是ヲ天地自

然ノ數ト云周易家ニハ小衍ノ數ト云衍ハ大也豐也盛也盈也數

也盛也盈也

ニ盈タル義也天地ノ中ニ生一物状若葦牙便化爲
神號國常立尊ト云ハ此中央ノ五位ニ相應シテ
化生シ給ヘル神也此神ヲハ又天常立ト云天御中
主ト云元氣ヨリ萌牙シ五大ヲ化成シ給ヘリ又天
狹霧國狹霧臣申出生ノ根元稱シ奉ル也又ハ
天禪日國禪月臣申ス陰陽不二ノ獨尊タル御
號也此神五大ヲ一身脩ヘ給ヘリ然而獨立尊
坐五德ノ一以不可名之故天地ノ俱生神臣申

ス也五行成數各著其德也
次國狹槌尊又國狹立次豐斟淳尊又豐國主凡三神又其
國常立ヲ奉加乾道獨化所以成此純男次泥蒲鑿反土養
尊沙土養尊又泥土根次大戸之道尊大宮邊尊

又大戸摩彦大戸摩姬又大富道大富邊次面足尊惶根尊乾坤之道相
參而化所以成此男女

解曰常說ニ八國常立ヨリ次第ニ化生上三代ハ純
男次三代ハ陰陽形已ニ著而無其態思ヘリ秘說
ニ八國常立ヲ五德ノ神ニテ代ノ次第ニハ非ル也此
五尊出生給ヘルト又五行ノ出生ニテ料簡シ奉ル
ヘシ次ニ前小衍ノ數一二三四五也再往シテ計之ヲ八地六
天七地八天九地十ト出生ス其數合テ五十五此
ヲ大衍ノ數ト云此再往ノ時ニハ水火木金土ト
成也 是五大ノ位ヨリ衡其德ヲ等也先地六ヲ
生スル故ハ中央ノ五北方ノ一二相感シテ六ト成是
ヲ水ノ一六ト云次ニ又南方ノ二ニ感シテ七トナル

是ヲ火ノ二七ト云次東方ノ三ニ感シテ八トナル
是ヲ木ノ三八ト云次又西方ノ四ニ感シテ九トナル
是ヲ金ノ四九ト云次又中央ノ五自感シテ十ト成ス
是ヲ土ノ五十ト云五大ノ中ノ東方ノ空ハ木ト成
故空乃木ト云ニハ非ス空ヨリ風ヲ生風ニ水火ノ
二德アリ相感シテ心ヲ生シ身生ス然後毛髮生
カ如凡五行出生根元人靈心身ヲ本トシテ國土
艸木ヲ成也故火ハ心也南方ノ三ノ卦ヲ以作之
水ハ身也北方ノ三ノ卦ヲ以作之此水火ニ於相互
先後スル理ナリ不二ノ義炳焉也喻ヘハ有心然後
ニ有身ト云ハ火先ツ生水後ニ生也ニ水和合シテ心
詫此中ト云水先生シ火後ニ生スル也
中陰胎内等ノ義
委ハ内典ヲ可訪也

ニ水不壞シテ骨髓ト成リ血肉ト成心処中胎ヨリ
五七月至人体ヲ生ス此ヲ五位ト云五位ノ一五大ノ從此
次第ニ手足等ノ形ヲ生ス眼目等ノ根ヲ生シ毛髮
ヲ生皆是水火風ノ所成也如此五行ヲ生成スル時
ニ木ヲ以空ノ位ニ居リ艸木ノ色初黃後青ニ虚
空ヲ表スル也次ニ西方風金ト成故ニ風水相應シテ
泡沫ト成其泡沫堅固ニシテ天上ノ諸宮殿乃至須
彌四大洲等ヲ生スルト云一ハ内典ニ説也然レ者有
形体皆是地ノ大德也泡沫ノ積也其地ヨリ生スル
至テ精ナルハ金トナリ麤ナルハ土ト成依之金ハ西
方ノ風位ニ居シ西方風
方陰也土中央ニ處也如此次第ニ
生起シテ五行ノ德ヲ著ニ各神化生此故ニ合スレハ

國常立一身ノ上ノ五徳開ハ國狹立等尊五神ニ
坐ス也又國狹立豊國主神ハ純男ト云ヘリ此位ニ
男女ト云難シ決定陰陽不二ノ神ナルヘシ又水火
ニハ對揚ナレ以之可料簡木金土ハ對揚アルヘシ

^{第五}故各々ニ陰陽相對シテ化生シ給也

陰陽二神產生人物也

次有神伊弉諾伊弉冊尊云々

伊弉諾尊伊弉冊尊立於天浮橋之上共計曰底下
豈無國歟迺以天之瓊矛指下而探之是獲滄溟其
矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之曰碓馭廬島云云

一書曰天神謂伊弉諾尊伊弉冊尊曰有豊葦原千
五百秋瑞穗之地宜汝往脩之迺賜天瓊戈云々

解曰上來ノ五神ハ五行ノ精妙ナル處也

開合ノ義
右ニ載之

五徳ヲ陰陽二神與造化ノ元祖云給ヘル此ヲイサナ

キイサナミト申

或云伊弉諾ト云ハ内典ニイハスル伊
舍那天ナリト伊舍那ハ自在ノ義也

地水

火風空

若ハ土水
火金木

次第スルニ上轉ノ義陽神ノ徳也空

風火水地

若ハ木金
火水土

次第スレハ下轉ノ義陰神也上下ハ

即左右也是故ニ陽神ハ左ヨリ旋陰神ハ右ヨリ旋テ

一面會テ万物ヲ產生ス陰陽二ニシテ不二ノ謂也天

地俱生神ハ和魂也中間ノ五神ハ五行ノ徳也

幸魂ト
云ル此

歟陰陽二神ハ荒魂也次第ニ約テ七代ト稱スレ凡

實ニ二代也七代十一神坐ス也

^{第六}變易五行建立八卦

三乾三坤三坎三離

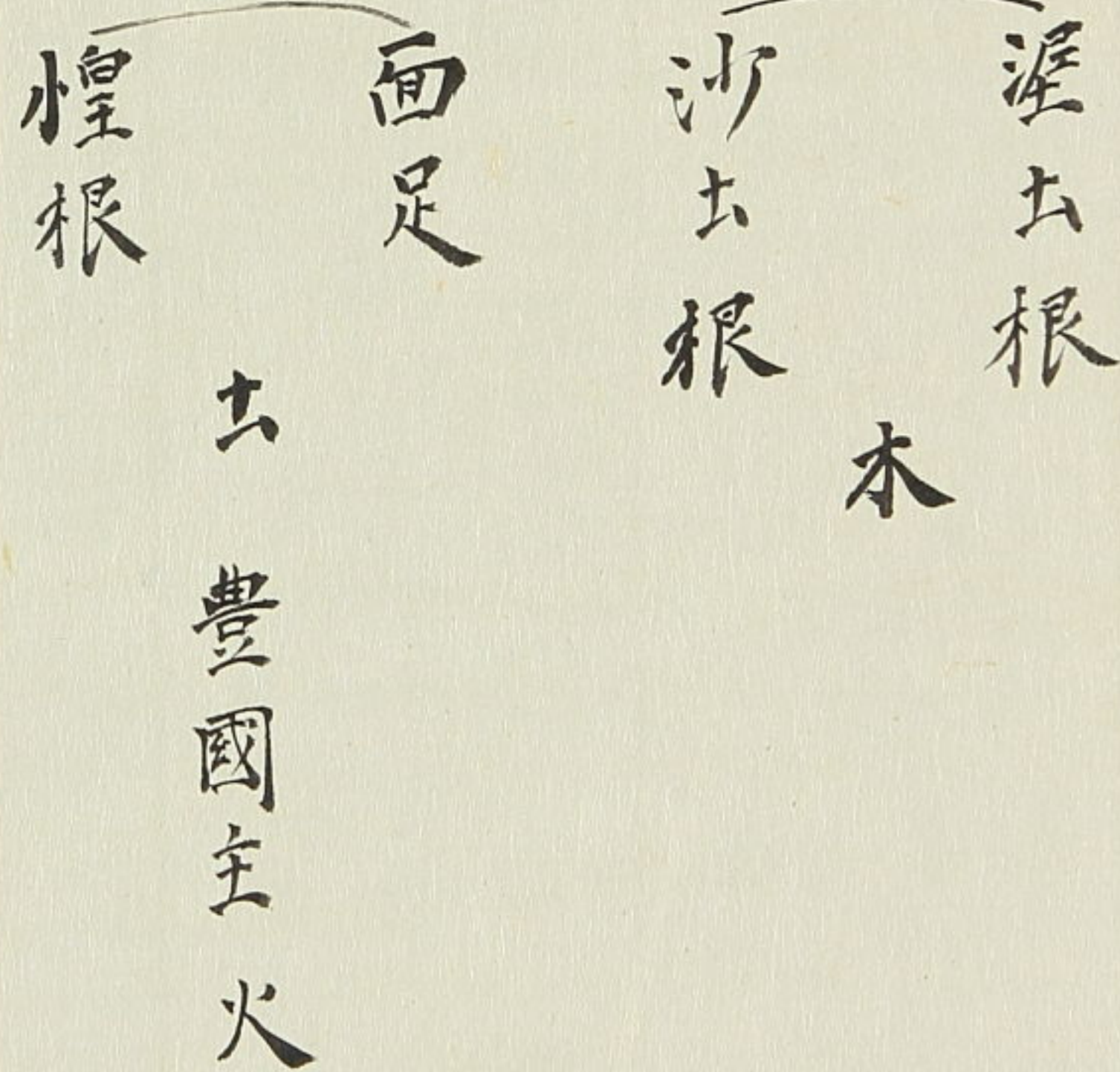
三震三艮三巽三兌

此ヲ云八方之卦也一者為陽爻天ノ象也二者為陰爻地之象也一成二成三成是三才之理也故畫三爻以成八卦也通天地之道極万物之理無善於此八卦矣

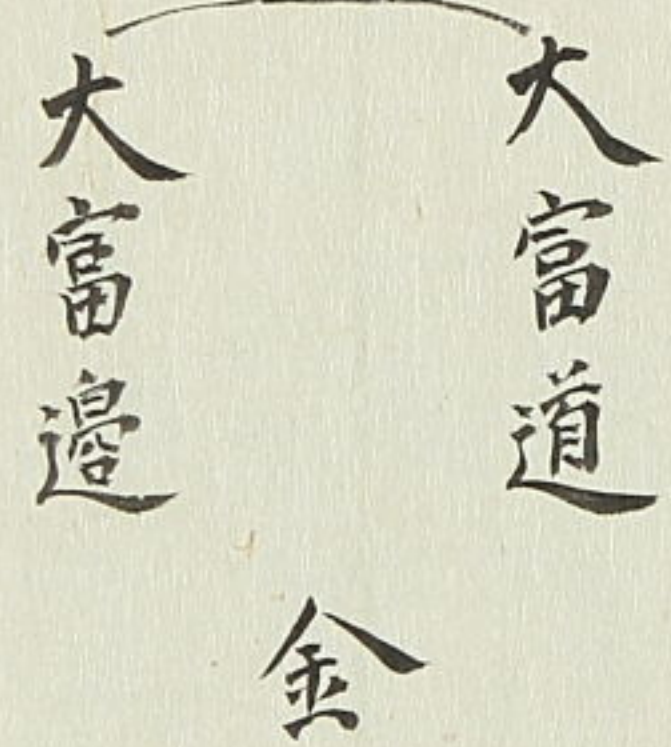
解曰今此八卦ヲ建立スル我國ノ說ニ不見然而其理ハ炳焉也五方ノ位ヲ成シ四維道ハ隨テ有此時ニ至テ北方ノ天一ノ位ヲ西北ニ置乾ヲ以テ天ノ方ノ此故也乃乾卦ヲ成是ハ天也陽之初南方ノ地二ノ位西南ニ置乃坤卦ヲ成是ハ地也陰之初也東方天三ノ位ハ東北ニ居ス乃艮ノ卦ヲ成是ハ山也西方地四位ヲ遷シテ東南ニ居乃巽卦成是風也中央ノ天五ノ位ハ不動

之如此四維遷了テ地六位北方居ス乃坎卦ヲ成也是水也天七位南方ニ居乃離卦ヲ成是火也地八ノ位東方ニ居乃震卦成是雷也天九ノ位西方ニ居兌ノ卦ヲ成是澤也若其生起ヲ云時ハ北方ノ三卦ノ一陽ハ万物ノ生スル初也喻ハ一年十二月ハ六陽六陰十一十二正二三四此ヲ六陽トス五六七八九十此ヲ六陰トス十月ニ至テ陰氣終盡ス十一月冬至ノ夜半子ノ剋一陽初テ生ス終而又始リ極テ又生理也此一陽ノ氣ヨリ次第ニ生起スル子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥五ニ消息シテ萬物始終ノ相ヲ表スル也委曲ハ別ニ可習ナリ我國ノ神道ニ可配當五行ノ八神ニテ其義ヲ可成ナリ陰陽俱生シテ神中央ニ在テ不動國常立ノ神ノ御事也中央ノ五地ノ極ニ配ル

右二記 故水火木金土ノ五行八神ハ八方ニ居陽神
 之ヲ 八上方ニ居テ天ヲ主陰神ハ下方ニ居テ地ヲ鎮ヘシ
 伊弉諾神功已了高天原ニ還給ヒ伊弉冉尊ハ八神ヲ
 大ノ神ニ被破テ地底ニ留リ給テ其義炳焉 八神ヲ
 八方ニ安置セハ五德ノ神ヲ五方ニ安シテ然後八
 位ヲ成ヘシ所謂五德者



國狹立水



八位者

溼土根 山

面足 雷

大富道 風

沙土根 水

大富邊 火

國狹立天

惶根 澤

豐國主地

上行五方八卦配當恐是今案也然而五行以推之
 無過失也天北斗者水一六相合精也易家說故七星成

此本命元辰星卜入其德分日月火水木金土ノ七曜卜
名ノ此七星ノ德又四方者二十八宿卜云四方各七然
則北辰北斗七曜二十八宿諸星元起含靈本命也
又東方神ヲ青龍卜云木精神也其數二
依于八龍神也南方神朱雀
火精ノ神也其數二依于七鳥神也西方神ヲ白虎云金精ノ神也其數二
依于九虎神也北
方ノ神ヲ玄武卜云水精ノ神也其數二
依于六蛇神也中央土神也五基
神也
云其色ハ黄也内典ニハ堅牢
地神卜云其習アルハ
者也此理ハ兩儀造化之根元也萬象森羅之因起也
故陰陽二神礮馭盧鳴降給于八尋殿化立即大八洲
國ヲ產生ス又日像ノ寶鏡作于八咫鏡卜名付ケ
神璽寶八坂瓊曲玉稱又神劍ハ乃八岐ノ大蛇ノ精
神也其蛇ヲ斬レカハ八ノ雷卜成于天ニ昇于甚深ノ

義不可勝計矣

^{第七}地神五代應五行運也

皇祖大日靈尊者陰陽二神之所生也或云陽神
左手持白銅鏡而所生也此神又号天照太神又
号日神弟二代正哉吾勝々速日天忍穗耳尊者
感日神弟素戔嗚鳥神所獻之寶玉而所化生也弟
三代天津彦々火瓊々杵尊者吾勝尊娶天神高
皇產靈尊女栲幡千千姬所生也秦皇太神初始
降臨葦原中國第四代彦火々出見尊者瓊々杵
尊娶大山祇女木花閨耶姬所生也弟五代彦波
瀲武鸕鷀草葺不合尊者彦火々出見尊娶海童
神女豐玉姬所生也已上此曰地神五代矣

解曰今此五代神五行運相應シテ次第出生シ給
ナルヘシ凡五行ハ水火ヲ本トセリ其精日月トス故天
祖神ニハ天禪日地禪月ト云御名アリ日月ノ二ト云
ニハ非ス其冥德稱スル也次伊弉諾尊日子申伊弉
冊尊月子申是陰陽二相分遂ニ日月神生給フ謂也
所生日月乃火精也但日神金德神坐深義アルヘ
シ更問之吾
勝尊ハ水德ノ神ニ坐ス同前瓊々杵尊ハ木德ノ神
ニ坐ス火々出見尊ハ正火中ヨリ出生シ給火德ノ神
ニ坐ス御母木華閨耶姬ト云乃木
精也生火ノ理分明ナリ膏不合尊土德ノ神ニ
坐ス如此配當奉五運次第更無差異五行相生終
又始古往今來無有窮極故祖勅シテ曰豐葦原
千五百秋瑞穗國宜汝往脩之云々千五百秋者爲

是無窮稱ナリ天照太神勅ニモ又如此下人代ニ至
テテ又相生法盡期アルヘカラス世祖神武天皇辛酉
年受禪給故金德ニ依テ天下ノ主タリ膏不合
尊土德ヲ養テ出生シ給フナルヘシ從是水木火土
ト相養シ給フ終テ又始ルヘシ若瓊々杵尊天降
給シテ元祖トセハ木火土金水ト相養スヘシ是故ニ
紹運ノ至相生道ヲ以天下ヲ治玉フヘキ也自然ノ
理無窮ノ德其意在此哉

第八
相生相剋此為順逆

五大者能生之理五行者所生之德相生者是順相
剋者是逆順逆之道悔吝之象也

解曰五大五行者能生所生也五方五季五色五音

五味等ノ用アルヘシ青赤黃白黒ハ如次空火地風
水ニ配當ス東南中西北ニ配シ春夏土用秋冬ニモ
當リ若受深次第ヲ云ニハ深相次最初ノ色ハ台中
央土用トス次黃色東方ノ春色次青色南方炎
色次赤色西方ノ秋色次黑色北方冬色是木滋
潤之次第也世間ノ法ニ受深ノ次第ト云五大
藏之色如此故五穀成就ノ為ニハ必此法ヲ修ス故金門鳥敏ノ法名音香味等モ准可知
也五季ニハ夏秋ノ間ノ土用ヲ正土位トス然而四季
ニ亘テ各一十八日合七十二日四季モ又七十二日都合
三百六十日は是ヲ以一年ヲ成也五方ニ中央土四方
四維統領ス若人身ノ上ニ配當スレハ肝心脾肺腎ノ
五藏如此ノ次ノ五季五色ノ氣也其内ニアル魂ハ

肝之所生神ハ心ノ志ハ脾之所生魄ハ肺之所生精ハ腎之所生ト云其外ニ
著ハ眼所生舌所生心ノ口所生老子經口ヲハ犯他ニ主ル
腎肉血ト成ト云リ鼻所生肺所生同經ニハ五氣ヲ從鼻入テ藏於胃府形骸
息ヲ於入是ヲ命トス音聲ト成ト云リ古ニハ鼻ノ字自ニ從心ニ從テ作鼻
故息ノ字ハト心從也耳所生如此ニ配當シテ相生相剋
ノ道ヲ得テ身ヲ修メ養生ノ法トス乃至天文地
理算術巫醫音樂農業ノ道一トシテ此相ニ依テ
ト云トナシ若相剋スレハ其道不成シテ災害トナル相
生ハ是順也善也相剋是逆也惡也故王者國ヲ理ム
人臣ノ官ヲ守ル相生ノ政ヲ知テ相剋ノ亂ヲ濟也
反之者乱世亡國所謂仁礼智義信ノ五常如次
木火土金水所感也仁ニ依テ礼ヲ行ハ木生火礼
智依テヲ行ハ火生土智ニ依テ義ヲ行ハ土生金義ニ

依于信于行金生水信二依于仁于行八水生木是
于相生之道上云仁害智木剋土礼害義火剋金
智害信土剋水義害仁金剋木信害礼水剋火是
相剋之法上云明王相生之術于得于天下和平也暗
王相剋于行于國家凋弊又父子之道君臣之口夫
婦之間乃三才之道也尚書洪範九疇二專此義于
明而我國政術神代ヨリ此理炳焉深可學ナリ
第九造化之端皆是玄妙也

天地未割陰陽不分渾沌如雞子溟滓而含牙是一
其清陽者溥靡而為天重濁者淹滯而為地是二天
地之中生一物狀如葦牙便化為神號國常立尊
是三次國狹槌尊次豐斟淳尊乾道獨化所以成

此純男次有神湜土煮尊沙土煮尊次有神大戸之
道尊大苔邊尊次有神面足尊惶根尊乾坤之道
相參而化所以成此男女是四天神謂伊弉諾尊
伊弉冊尊曰有豐葦原千五百秋瑞穗之地宜汝
往脩之迺賜天瓊艾是五於是二神立於天浮橋
上天狹霧中臣云投戈求地因畫滄海而引舉之即艾鉞
垂落之潮結而為嶋名曰磯馭盧嶋是六二神降
居彼嶋化作八尋之殿又化豎天柱然後云々是七
迺生大八洲國次生海次生川次生山次生木祖句
々迺馳次生草祖草野姬既而伊弉諾尊伊弉冊尊
共議曰吾已生大八洲國及山川艸木何不生天下
之主者歟於是共生日神云々次生月神云々次生

姪兒云々次生素爰焉尊云々

解曰已上八ヶ條可有深意更問之

^{第十}治世要道神勅分明也

天孫降臨第一書

天照太神乃賜天津彥彥火瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種寶物云々因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣

又曰天照太神手持寶鏡授而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以為齋鏡云々

神皇實錄曰皇天御中主神與大日靈尊^盟宣天皇孫尊如八坂瓊之勾玉以曲妙治天下始如白銅鏡以分明看行山川海原乃提是靈劔平天下矣

解曰如玉曲妙ナルハ柔順ノ心ヲ表シ給フ如鏡ニシ

テ分明ナル正直ノ心ヲ表シ給也心ノ本元ナリ如劔

剛利ナルハ決斷ノ心ヲ表シ給也^{智也}尚書ニハ剛柔

正真三徳在云礼記ニハ知仁勇ノ達徳在云其義皆

一也當其道ヲ傳ヘ給而已ナラス神器ニ顯シテ萬

代ノ靈トシ給フ梵漢ニモ此類ナシ神道妙ナルハ

允慮難測治世ノ要道豈有異途乎正直慈悲決

斷三ヲハ不出也内外ノ典籍千万ナレ在又此三ニハ

不過ナリ神勅ニ至テハ言納ニシ旨廣ニシテ旨廣シ

可貴々々可仰々々此事莫ニ元元集ニノセタリ志道

者更問之

此書北畠准后親房雖為神道秘傳之書依御所望
今相傳者也必慎不可外見焉

右東家秘傳得一本校合畢

右以厚書類從卷第二十八神祇部書寫之畢

天保七年甲申年九月七日

中村萬喜直道

薰菫錄卷之百十終

薰菫錄卷之百六終

